

暗い日曜日の戯れ

## 梗概

突然死が頻発していた。

死亡者は一様に死の直前にスマホを操作していたことがわかる。

日曜日の夜。

数年間引きこもり状態の若林（23）が明かりのない部屋の中でスマホをいじっていたときのこと。

若林が目を閉じると、スマホ画面の残像が放つ光の奥から有馬（40）が姿を現す。

有馬は異界の化け物であり、スマホ画面の光を介して人間の瞳の中へと現れ、その人間の命を喰らうのだった。

有馬に襲われ、間一髪のところで難を逃れる  
若林だったが、その後、戯れ心からあの手こ  
の手で有馬を挑発するようになる。

そして長い攻防の末、若林は自分の瞳の中に  
有馬を幽閉することに成功する。

有馬は「解放しなければ殺す」と脅すが、社  
会から落伍し生きる希望を失っている若林は  
意に介さない。

追い込まれた有馬は拷問によって若林をねじ  
伏せ、瞳の中から脱する。

両者の因縁は深まり、殺し合いは避けられな  
いものとなる。

有馬をしとめたい若林はこれまでの有馬の言  
動から光が弱点であると推測する。

迎えた決戦の朝。

瞳の中の暗闇で対峙する二人。

有馬がまさに若林を殺そうとした瞬間、若林は瞳を開けて太陽を見つめる。

瞳の中に吸い込まれた太陽の光が暗闇を眩しく照らし、有馬は息絶える。

こうして長い一日は終わり、若林は数年ぶりに朝の光に祝福されるのだった。

登場人物

若林 (23) 引きこもり

有馬 (40) 人喰い

男1

男2

愛子 (49) 若林の母

○男一の部屋（夜）

明かりの消えた部屋。

スマホの光がぼつんと室内を照らしている。  
る。

男一、ベッドに寝ころんでスマホゲーム  
をしている。

スマホ画面に game over の文字。

男一、スマホを枕元に放る。

男一、目をつぶる。

○男一の瞳の中（男一の主観映像）

暗闇にスマホ画面の形をした光の残像が  
ぼんやりと浮かんでいる。

有馬（40）、光の奥から現れる。

有馬、髪を振り乱しながら怖ろしい形相  
で迫ってくる。

○男二の部屋（数日後・夜）

明かりの消えた部屋。

スマホの光がぼつんと室内を照らしてい

る。

男2、ベッドに寝寝ころんで LINE をしている。

スマホ画面に以下のやりとり。

「最近ヤバくない？」

と LINE がくる。

「ヤバイ」と男2が返す。

「突然死のニュース」

「うん」

「死んだ人たちはみんな死ぬ前にスマホやってたんだって」

「らしいね」

「しかも死亡時刻は全員夜」

「じゃあなんでこんな時間に LINE した？」

「笑笑」

「笑笑」

「寝るね」

「おやすみ」

ハートマークのスタンプがくる。

男<sup>心</sup>、ニヤケながらハートマークのスタンプを返す。

男<sup>心</sup>、スマホを枕元におく。

男<sup>心</sup>、目を閉じる。

○男<sup>心</sup>の瞳の中（男<sup>心</sup>の主観映像）

暗闇にスマホ画面の形をした光の残像がぼんやりと浮かんでいる。

有馬、光の奥からから現れる。

有馬、髪を振り乱しながら怖ろしい形相で迫ってくる。

○若林の部屋（数日後・夕）

カーテンの閉め切られた暗い室内。

スマホの光がぼつんと室内を照らしている。

若林（23）、座り込んでスマホをいじっている。

スマホ画面の検索欄に以下の文字。

「自殺 楽な方法」

検索結果に以下の文字が踊る。

「東京都ころといのちのほっとナビ」

「ヤフー知恵袋 楽な死に方を教えてください

ださい」

「自殺したいと思っている人へ」

若林、スマホを床におく。

若林、ため息混じりに目を閉じる。

○若林の瞳の中（若林の主観映像）

暗闇にスマホ画面の形をした光の残像がぼんやりと浮かんでいる。

有馬、光の奥から現れる。

有馬、髪を振り乱しながら怖ろしい形相で迫ってくる。

有馬、コケる。

○若林の部屋

若林、はっと目を開ける。

○若林の瞳の中（若林の主観映像）

有馬、若林を見失い、きよろきよろと辺りを見回す。

○若林の部屋

若林、唾然としている。

若林、目を閉じる。

○若林の瞳の中（若林の主観映像）

有馬、きよろきよろしている。

有馬、若林に気づく。

有馬、若林に襲いかかる。

○若林の部屋

若林、はっと目を開ける。

○若林の瞳の中（若林の主観映像）

有馬、若林を見失い、きよろきよろと辺りを見回す。

スマホ画面の形をした光が小さくなっていく。

○若林の部屋

若林、目を閉じる。

○若林の瞳の中（若林の主観映像）

すっかり小さくなった光。

有馬、光のほうへ戻っていく。

有馬、光の前で立ち止まり、振り返る。

有馬、若林をじっと見る。

○若林の部屋

若林、目を開ける。

若林「…」

○若林家・階段／廊下

若林、降りていく。

若林、トイレへ入る。

○若林家・リビング

愛子（49）、晩飯の支度をしている。

○若林の部屋

スマホの光がぼつんと室内を照らしている。

若林、スマホを見ている。

画面にニュース記事の見出し。

「謎の突然死」

「原因はスマホか？」

○有馬の部屋

薄暗い室内を蝋燭の灯りが淡く照らしている。

有馬、テーブルに座ってナイフとフォークで人間の脳味噌をがつついている。

床には無数の頭蓋骨。

と、壁にスマホ画面の形をした光のドアが現れる。

有馬、ドアを見て反射的に立ち上がり、ドアの奥へ入っていく。

×

×

×

光のドアが次第に萎んでゆく。

有馬、小さくなった光のドアをくぐり抜けて帰ってくる。

有馬の手に人間の生首。

有馬、生首をテーブルの皿にのせる。

有馬、椅子に座りナイフとフォークを手にする。

と、壁にまた光のドアが現れる。

有馬、ドアを見て反射的に立ち上がり、ドアの奥へ入っていく。

○若林の瞳の中

暗闇の中に光のドア。

有馬、ドアから入ってくる。

正面に若林の姿。

有馬、若林を見て、にやり。

有馬、若林へ飛びかかる。

と、若林の姿が消える。

○若林の部屋

若林、目を開けている。

若林、素早くまばたきを繰り返す。

○若林の瞳の中

有馬の正面で、若林、忙しく消えたり現れたりしている。

有馬「…」

有馬の背後で光のドアが次第に萎んでゆく。

有馬、ドアのほうへ踵を返す。

○若林の部屋

若林、目をつぶる。

○若林の瞳の中

有馬、若林のほうを振り返りながらゆっくりと下がっていく。

若林、姿を現したままじっと有馬を見て

いる。

有馬、飛びかかろうとするフェイントを  
若林に仕掛ける。

若林、消える。

若林、すぐに現れる。

有馬、ドアの手前までいく。

有馬、ドアに入ろうと見せかけ、猛ダツ  
シュで若林へ飛びかかる。

若林、消える。

有馬、立ち止まる。

若林、姿を現す。

光のドアが消えかけている。

有馬、潜り込むようにドアの奥へ帰って  
いく。

### ○若林の部屋

若林、目を開ける。

若林、にやりと笑う。

### ○有馬の部屋

有馬、戻ってくる。

有馬、壁を叩いて悔しがる。

○若林の部屋

若林、スマホ画面にガムテープを貼りつけている。

ガムテープで覆われていくスマホ画面。

○有馬の部屋

有馬、テーブルで脳味噌にがつついている。

と、壁に覗き穴のような光が現れる。

有馬、反射的に立ち上がり、光の穴を見る。

有馬「…？」

有馬、光の穴をのぞき込む。

○若林の部屋

若林、目を閉じている。

床にスマホ。

ガムテープで目張りされ小さな穴の形になつた画面が光を放っている。

○若林の瞳の中（若林の主観映像）

光の穴の向こうに有馬の目玉。

有馬、若林を伺っている。

光の穴、やがて消える。

○有馬の部屋

有馬、テーブルの皿をぶちまけて悔しがる。

有馬、室内をうろろしている。

と壁に光のドアが現れる。

有馬、ドアへ飛び込んでいく。

次第に萎んでいくドア。

有馬、生首を引っ提げてドアから戻ってくる。

有馬、生首を乱暴にテーブルにおく。

と壁に光のドアが現れる。

有馬、ドアへ飛び込んでいく。

次第に萎んでいくドア。

有馬、生首を引っ提げてドアから戻ってくる。

有馬、生首を乱暴にテーブルにおく。

と壁に光のドアが現れる。

有馬、ドアへ飛び出していこうとする。

が、ドアが細長い形をしており、有馬、入れずに壁に体をぶつける。

#### ○若林の部屋

若林、目を閉じている。

床にスマホ。

ガムテープで目張りされ細長い形になった画面が光を放っている。

#### ○若林の瞳の中（若林の主観映像）

有馬、光のドアの奥でもがいている。

#### ○若林の部屋

若林、にんまりする。

○有馬の部屋

有馬、地団駄を踏む。

○若林の部屋

若林、スマホ画面に貼られたガムテープを剥がしている。

と床に小さな蜘蛛。

若林、空のペットボトルを手に取る。

若林、ペットボトルの飲み口で蜘蛛を覆い被す。

蜘蛛、ペットボトルの中をよじ登っていく。

若林、ペットボトルのキャップをしめる。

若林「(捕らえた蜘蛛を見つめ)…」

○有馬の部屋

有馬、室内をうろうろしている。

有馬、苛立っている。

と壁に光のドアが現れる。

有馬「…」

○若林の瞳の中

有馬、入ってくる。

正面に若林の姿。

若林「(にやり)」

有馬「(凄む)」

有馬、ゆっくりと若林に近づく。

突然、光が暗闇を包み込む。

有馬「?!」

○若林の部屋

若林、目をつぶったまま、瞼の上から両目に懐中電灯を押しあてている。

○若林の瞳の中

有馬、眩しきで目をつぶる。

有馬、悶えながらドアのほうへ引き返す。

有馬、何とか目を開ける。

有馬「?!」

ドアの光が懐中電灯の光に紛れ、ドアが見つかからない。

○若林の部屋

若林、懐中電灯を瞼から放す。

○若林の瞳の中

有馬、光のドアを見つけられずにうろたえている。

やがてドアもろとも光が消え、暗闇が訪れる。

有馬、呆然と立ち尽くす。

愛子の声「ご飯よー」

○若林の部屋の前

愛子、ドアをノックする。

愛子、鍋焼きうどんと水ののったトレイをドアの前におく。

愛子「おいとくからね」

○若林の部屋

若林、目をつぶっている。

○若林の瞳の中

対峙する若林と有馬の姿が暗闇の中に映し出されている。

若林≧(モノローグ)「俺たちは孤独だった。俺たちはいつだって日陰者のように街を歩いた。俺たちには洗練された祝福などあり得るはずもなかった」

有馬≧「俺たちは生まれながらにして罪人だった。誰かに心を開くことも、誰かと本気で笑い合うことも、俺たちにはできなかった」

若林≧「俺たちは薄暗がりの中で自分を持って余し、そうして何一つ決着をつけられぬまま限りなく緩慢に、しかし確実に時間は過ぎてゆき…」

有馬≧「愛を見つけること」

若林≧「愛を育むこと」

有馬≧「そんな当たり前の喜びさえ指の隙間

から砂のようにすり抜けてしまう」

○若林の部屋（夜）

日が落ち、暗くなった室内。

スマホ画面の光だけが微かに室内を照らしている。

若林、目を閉じている。

やがてスマホがスリープし、室内に完全な闇が訪れる。

○若林の瞳の中（若林の主観）

SE 近づく足音

足音、目の前でやむ

以下、有馬と若林の姿は見えず、暗闇の中に声だけが響く。

有馬「単刀直入にいおう」

若林「…」

有馬「解放しなければお前を殺す」

若林「…」

有馬「察しはついているだろう。ここはお前

自身の瞳の中だ。人間の網膜に焼き付いたスマホの光を経由して俺はお前たち人間の中に入り込み、脳味噌を喰らうことができる」

若林「…」

有馬「ここでのルールは二つ。一つ。お前が目を閉じている限りお前はこの空間に存在し続ける。二つ。お前はこの空間で一步たりとも動けない。ゆえにこの俺から逃れることは不可能」

若林「…」

有馬「そこいるんだろ？ さア、今すぐスマホで光のドアをこしらえろ」

若林「…」

有馬「素直にすりゃこれまでの再三にわたる俺への侮辱行為は見逃してやる」

若林「…気に入らないね」

有馬「何だと？」

若林「黙って聞いていれば、まるでアンタのほう有利な立場にいるかのような物言いだ」

有馬「事実をいったまでだ」

若林「俺が死ねば光のドアを作ることにはできず、アンタは永久にこの暗闇から出られない。そうだろうか？」

有馬「…どうかな？」

若林「俺を殺すことはアンタ自身をも殺すこと。つまり、アンタに俺は殺せない（とにやり）」

有馬「…そうか」

SE 指をバキバキ鳴らす音

有馬「腹が減ってくると理性がなくなるのが俺の悪い癖だ。考えを改めるなら今のうちにしな」

若林「…アンタ、俺が死ぬのを怖がっているとでも？」

有馬「…」

若林「俺は社会から落ちこぼれた負け犬だ。もとより生きることなんか諦めている。楽に死ねるなら今すぐ死にたい。そんなことを毎日考えてる」

有馬「…」

若林「今死ねば英雄になれる」

有馬「英雄？」

若林「命を擲ってアンタから世界を救った英雄にね」

有馬「誰にも気づかれないさ」

若林「俺はそれでいい」

有馬「…」

若林「さア殺してくれよ。俺は死んだっていいんだ。早く殺せよ！」

暗闇の中、しばしの沈黙。

若林「(にやりと) 形勢逆転だ」

有馬「(嘲り笑う)」

若林「…？」

有馬「どうやら自分のおかれた状況がイマイチわかっていないようだな」

SE パチンと頬を叩く音

○若林の部屋

暗闇の中、若林の絶叫が轟く。

若林「ぎゃわうああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ  
あああああああう！！！！

○若林の瞳の中

若林「(喘ぐ) 何するん…」

S E パチンと頬を叩く音

○若林の部屋

若林「(絶叫)」

S E ドアのノック音

愛子の声「どうしたの?! 何してるの?!」

○若林の瞳の中

若林「(叫ぶ) 待てッ!」

有馬「…」

若林「待ってくれッ!」

有馬「お前がここに現れた瞬間、俺は即座に  
お前を殴る。この暴力は永遠に続くぞ。いつ  
まで耐えられるかな」

若林「やめろ…」

有馬「有利な立場にいるのは俺なのか、お前  
なのか、いってみる！」

若林「…下がれ」

有馬「なぜ？」

若林「下がらないと要求は呑まない」

有馬「…」

SE 足音が聞こえ出す

足音、ゆっくりと遠のく

足音、やむ

有馬「一分だけ待ってやる！」

○若林の部屋

室内にスマホの光が灯る。

その微かな光が若林の姿を映し出す。

若林、苦痛に顔を歪めている。

若林、スマホの光をじっと見つめる。

○若林の瞳の中

暗闇に光のドアが現れる。

光が若林と有馬の姿を映し出す。

有馬「最初からそうすればいいものを」

有馬、ドアへ入っていく。

○有馬の部屋

有馬、入ってくる。

有馬「（苛立って）オンドレ！ あのクソガ  
ギ！ 舐めやがって！」

有馬、乱暴にテーブルのナイフを手にす  
る。

弾みで蠟燭が床に落ちる。

蠟燭の消え、室内が暗闇に包まれる。

○若林の瞳の中

有馬、ドカドカやってくる。

有馬「バカがっ！」

有馬、ナイフを投げる。

ナイフが若林へ猛スピードで飛んでくる。

若林、間一髪、消える。

有馬「（舌打ち）」

○若林の部屋

スマホの光が微かに照らしている。

若林、荒い息を吐く。

若林「危なかった：あの野郎：逃がしてやったのに：」

スマホがスリープし、室内が暗闇に包まれる。

若林の怒り狂った声が響く。

若林「(叫ぶ)やる！ 絶対にやる！」

SE ドカドカ歩く足音

乱暴にドアを開ける音

廊下の明かりが室内に差し込む。

若林、廊下に出る。

若林、鍋焼きうどんと水ののったトレイを持って戻ってくる。

若林、ドアを閉める。

× × ×

SE ズルズルとうどんを啜る音

水をガブガブ飲む音

ズルズルとうどんを啜る音

その音と重なるように：

○有馬の部屋

S E ジュルジュルと脳味噌を啜る音

ボリボリ骨を砕く咀嚼音

壁に光のドアが現れる。

光が有馬の姿を映し出す。

有馬、脳味噌を貪っている。

有馬「(物凄い形相で)クソガギ！ 必ずやっ  
たる！」

○若林の部屋

若林「弱点はなんだ！ 奴の弱点は！」

S E ノックの音

愛子の声「いい加減、出てきたらどう？」

若林「…」

愛子の声「そうやってもう何年になるの？  
いつまでもこのままってわけにはいかないん

だし」

若林「∴」

愛子の声「聞いている？」

廊下の明かりが室内に微かに漏れている。

若林、はっとする。

○（回想）若林の瞳の中

懐中電灯の光が射し込む。

有馬、眩しさを目をつぶる。

有馬、悶えながらドアのほうへ引き返す。

○（戻って）若林の部屋

若林「∴光？」

S E カーテンの開く音

室内が月明かりに照らされる。

若林、窓の外を覗いている。

○有馬の部屋

S E かなづちで釘打ちをする音

壁に光のドアが現れる。

光に照らされて有馬の姿が映し出される。

有馬、猟銃を手入れしている。

有馬、銃身をカチツとハメる。

光のドアが消え、再び暗闇に包まれる。

○若林の部屋（朝）

カーテンの隙間から朝日が射し込む。

朝の光が若林の姿が映し出す。

○有馬の部屋

有馬、猟銃を手にくたた寝している。

光のドアが現れる。

有馬、はっと立ち上がる。

有馬、ドアの前に立つ。

若林の声「忠告だ」

有馬「…？」

若林の声「一歩でも入ったらアンタは死ぬ」

有馬「…ほざけ」

○若林の瞳の中

有馬、入ってくる。

有馬、猟銃を乱射する。

が、若林の姿はない。

有馬「…」

○若林の部屋・ベランダ

若林、目を見開き、燃えるような朝日を見つめている。

○若林の瞳の中

有馬、猟銃を構えている。

有馬「出てこい！」

○若林の部屋

若林、朝日の光を見つめている。

目が焼かれ、苦しい。

若林、こらえる。

若林、じっと朝日の光を見つめる。

若林、こらえにこらえ、かっと目を閉じる。

○若林の瞳の中

暗闇にありったけの光が射し込む。

有馬「?!」

有馬、眩しさで目を覆う。

持っていた猟銃が床に落ちる。

○若林の部屋・ベランダ

若林、目を閉じている。

○若林の瞳の中

眩いばかりの光に包まれた空間で、若林と有馬、対峙している。

若林≧「俺たちは怖かったんだ。俺たちはいつだって光を浴びることに怯えていた」

有馬≧「俺たちは生まれながらにして闇の住人だった」

若林≧「俺たちは光を恐れ、たちまち闇の中へと飲み込まれていった」

有馬≧「恐れるな」

若林「ただ光のさすほうへ」

有馬「ただ光の導くがまま」

若林「例えどんな結末を迎えようと自分の力を出し切るんだ。最大限の力でやるんだ」

有馬「俺たちは光の中を行進する兵隊だ」

若林「俺たちは光の中を飛ばたく黄金の鳥だ」

有馬「勇気を出すんだ」

若林「光の中を進む勇気を！」

有馬「光を恐れない勇気を！」

光が若林と有馬を飲み込む。

有馬の断末魔の叫び声。

○若林の部屋・ベランダ

若林、ガッツポーズする。

○若林の部屋

若林、目をつぶる。

○若林の瞳の中（若林の主観）

視界の片隅に有馬の死体が転がっている。

○若林の部屋

若林、目をつぶっている。

若林の口元に笑みがこぼれる。

(おわり)